

物流機能集積と高い生産性を軸に

■成田空港新貨物地区、データ連携も重視

成田国際空港会社（NAA）は、滑走路延伸・新設、それに伴う施設再編などの「第2の開港プロジェクト」において、新貨物地区の目指すべき姿として「物流機能の集積」と「高い生産性」を軸に検討を深掘りする。上屋の集約・ワンルーフ化、フォワーダーの集積、空港隣接地との一体運用といった「航空物流クラスター」の形成を目指す。併せて自動化・ロボティクス、デジタル化・データ連携などによって、人手不足下でも成長可能な高い生産性を実現する。「東アジアの貨物ハブ」として、増加する貨物需要を受け止める処理能力、世界最高水準の接続性と貨物処理スピード、高付加価値貨物を支える厳格な品質管理など、高度な物流機能を追求める方針だ。

25日開催された「成田空港新貨物地区検討協議会」の第2回総会でNAAが改めて新貨物地区の目指すべき姿・コンセプトを整理。関係事業者・機関に説明した。NAAは、企業・国家にとって国際競争力上も経済安全保障上も重要な社会的意義をもつ「日本最大の貿易港」であることを説明。アジアと北米を結ぶ地理的優位性、日本の地政学的安定性、首都圏空港の国際貨物機能を支える成田空港としての役割を改めて強調した。

一方、近隣アジア諸国・地域の空港との競争の激化、B滑走路（現在2500メートル）における大型フレイターの搭載重量の制約、貨物施設の分散といった課題に言及。トランジット貨物を取り込めきれずに、貨物ハブ機能として東アジアの競合空港の後塵を拝している現状を説明した。

こうした課題がある中で、B滑走路の延伸（3500メートル化）とC滑走路（3500メートル）新設による、北米向け長距離輸送におけるノンストップ貨物輸送力の最大化、貨物施設の集約によるトランジット貨物の取り扱いの効率化、高速道路ネットワーク強化による成田・羽田間の貨物流動のさらなるシームレス化などに取り組む方針を示した。

新貨物地区と隣接する空港外の物

流施設との連携も強化する。強靱なサプライチェーンの拠点として、トランジット貨物の取り込み、国際的な保管・流通機能を確立。日本発着の輸出入貨物とトランジット貨物の取

り込みによって貨物搭載量を高い水準で維持あるいは拡大できる事業環境を構築して「絶対的な貨物量」を確保する。航空会社がネットワークを開設・維持・拡大できる事業環境を創出することで、日本の産業・貿易の発展に貢献するという好循環を目指す。NAA 営業部門貨物営業部は「日本の貿易を支えるために直送貨物の取り扱いは非常に重要であり、その使命を果たすためにもトランジット貨物の拡大は不可欠だ。トランジット貨物を増やすことで直送貨物を支える」と説明。こうした観点も踏まえて「東アジアの貨物ハブ」としての成長を追求める。

NAAは持続的な成長を支える基盤を構築するために「多様な人材を惹き付ける魅力的な就業環境」「社



滑走路延伸・新設、新貨物地区の整備などが計画されている成田空港（提供・成田国際空港会社）

会・地域・顧客から選ばれ続けるサステナブルな物流拠点」を掲げる。機能強化の状況を可視化できる環境を念頭に「カーゴ・コミュニティ・システム」といった共通プラットフォームの構築も今後の論点になり得るとしている。

成田空港のB滑走路延伸は29年度内の供用開始を予定している。C滑走路新設に関しては用地確保の課題から現時点で供用開始時期は未定。B滑走路延伸・C滑走路新設で年間発着容量（現在34万回）は50万回に拡大する。新たに空港用地となる東側の区画に整備される新貨物地区の供用開始は30年代初頭とされており、需要に応じて順次拡大する。